Libra I on vol.15

http://www.libra-sc.jp

りぶらいおん

特集：りぶらフォーラム 2010 概要

「りぶらを活用した、これからの生涯学習」

日 時：2月26日(土)　13:30 ～ 16:00　場 所：りぶらホール

図書館交流プラザ（愛称:Libra）は、「図書館」「活動支援」「文化創造」「交流」の４つの機能で構成されています。りぶらサポータークラブ (LSC) は、Libra の施設活用をサポートする活動をしています。

基調講演 1

「生涯学習施設としてのりぶらについて」

小川俊彦

岡崎市図書館交流プラザ運営協議会委員、逗子市立図書館館長

図書館を取り巻く３つの課題

①高齢化社会

現在私がかかわっている市では、65歳以上の高齢者が27%超えておりまして、毎朝20人から30人の、仕事に出かける必要のない方が図書館に並んでいらっしゃいます。もちろん、新聞雑誌をお読みになる方もいらっしゃるんですけれども、自分のライフワークをなさっていると思われる方も、かなりたくさんおみえになります。

図書館は世代を超えて利用できる施設なので、高齢者が多くなってもふしぎではない。退職後の時間をどう使うかが、もしかしたら、医療費の節減にもつながる。読書療法で、ボケ防止・機能回復ができるかもしれない。高齢者が外へ出て何かをする、自分の生き甲斐を探すということになってくると、図書館が受け皿として大変重要な意味を持ってくると思います。

高齢化社会に対応していく施設は図書館だけではないかもしれませんが、他の施設と大きく違って、個人の自由意思で使えるというところに大きなウェイトがあると思います。また、年金生活ということと切り離しては考えられないですね。出版社的には、週刊誌や文庫本はせめて自分で買ってほしい。でも、週刊誌も文庫も、図書館ではかなりリクエストが多のが現実です。

②多様化するメディア

今、電子書籍ということがいわれておりますけれども、デジタル化して情報だけ提供するようになれば、わざわざ図書館に行かなくてもいいんじゃないかということがあります。図書館の資料としては、デジタル化しただけで所蔵していることになれば、スペースもほとんどいらないんですね。

それからもうひとつは、携帯電話ですね。これから先、メールを使えるような生活が必要になってくる。特に、災害に備えるために必要になる可能性があります。メールを使えるか使えないということが、実はかなり大きな差になっています。でも、これにも費用がかかります。

だから、一番手軽に利用できるのが紙ですね。せいぜいメガネをあてにするぐらいで、それ以外何もいらない。高齢者にとっては機械が使えない、幼い子にとっては機械を買うことの問題がある。本当にうまく使いこなせるのかどうか、ということもあります。また、今後、電子書籍でしか読めないというものが出てくる可能性もある。そういう時に個人としてどうするのか、あるいは、図書館としてどうするのかということも問題になってきます。

③図書館が担う社会教育とは

アメリカには公民館というものが存在していません。図書館が社会教育をになう施設である、という考え方に基づいています。アメリカの教育長というのは学校教育のトップで、学校教育以外のトップが図書館長という位置づけです。

アメリカは、移民政策をとっていたものですから、言語上に問題がある、つまり英語ができない人が入ってきていた。そこで仕事をしてくれといっても、仕事を教えられないわけですから、まず英語を教えなければいけない。また、子どもたちにも教える必要がある。だから、学校に行かない子どもたちを図書館に集めて英語教育をやっていました。今、日本ではそれを一部拡大解釈して、ヤングアダルトサービスというような言い方をしています。

それからもうひとつは、リテラシー（読み書きできること）サービスで、移住してきた人たちは、当然読み書きができないですから、国が施策として、各図書館で教室をひらくというような言語教育をしてきました。

また、図書館のカウンターで、住民登録の方法を教えるサービスもあります。アメリカの図書館は、住民生活に深く溶け込んでいて、図書館の在り方自体が日本と違います。

課題に応える「りぶら」の在り方

「りぶら」という建物は、社会生活のかなりの部分を取り込むような形で計画されてきました。私は、図書館の閲覧室の一部に国際交流関係の資料があるとか、あるいは、男女共同の問題に関する資料があり、ジャズ資料も図書館の中にあって、専門の人が必要なら、そこに専門の人が配置できるようにしておくというような、一体型として機能していく図書館をイメージしていました。

ところが、話が進んでいくうちに、行政内の縦割りが前面化して、図書館とすべての機能が分離された、現在のような形になってしまいました。総合的には館長がいらっしゃるし、総合的な報告もなされておりますけれども、中で自由に活動するには、少し垣根がありすぎるのかなあと感じます。

いろいろな機能を、できるだけ図書館という閲覧空間の中に詰めて、取り込んでおいた方がよかったのではないかと思うわけですけれども、建築的にはもうできあがってしまいました。

「りぶら」のこれから

「りぶら」が開館して３年目、状況は少しずつ変わってきています。あと１～２年経つと、行政側の考え方ももっと変わってくる可能性があります。あるいは、市民サイドの考え方も変わってくる。この複合施設としての、一体型であることの意味を、改めて考えてみるということが、この建物をつくってきたコンセプトに一番マッチするんではないかと思います。

確かに公的には少し仕切りがあるけれども、構造をとっぱらえる工夫というのは、周囲のみなさんの力でできるのではないかなと思います。

基調講演２

「りぶらの役割と、これから‥‥」

斉藤秀平

第２次岡崎市生涯学習推進計画策定委員、名古屋商科大学教授

「りぶら」とは

市民の自発的な学びの環境は、図書館法が昭和24年に、社会教育法が昭和25年、博物館法が26年にできて、複合的に発想してつくられてきました。この「りぶら」は、この住民自らが学んでいく環境として行政が役割を果たしたという点で、非常に原点的な建物をつくられたんだなというふうに改めて思いました。

「りぶら」には、図書の利用以外に様々な関心をひろげていく、という機能があります。市内の市民活動団体の活動や、自分もこんなことに参加できそうなことがあるんだというふうに、いろいろな情報に触れられる場所になっていて、いろいろな活動が、この２年半の間に広がっている。

狭いところにいろんな施設をつくるというメリットで複合館がつくられていますが、意図的にこういう複合施設をつくった岡崎というのは、これから全国的につくられていくであろう生涯学習施設の先駆けになるのではないかと思います。

複合施設の中の「図書館」の役割

図書館と他の活動がうまくつながっているか、という問題があります。どういうふうにつないでいくのかということが、ここを使っている市民の課題です。しかし、本当は、図書館司書の方々がちょっとした関心を外に向け、他の大学の講義を受けたり、他の人と交流することによって視野を広げていくことで、力が大きくなっていく、豊かになっていくのではないかなとも思います。

こんな立派な建物ができますと、黙っていても市民が集まります。また、維持管理もまた大事な仕事になります。でも、「りぶら」の意図というのは、岡崎の文化や芸術や地域活動の中心になっていくと位置づけられ、市民が自立的・自主的に活動していくための力をどういうふうにつけるのかというところにあります。

本の貸し出しは確かに市民の大きな要求で、多くの市民の方にそのサービスをしなければなりません。しかし、それだけなら図書館司書という専門職は必要ありません。マニュアルがあれば事足りるのです。利用者が何を必要としているのか、というニーズを的確に捉えて図書館司書という仕事が成立するのですから、マンツーマンで市民とちゃんと顔を合わせるということがなくて、司書のスキルを向上させることはできないわけです。

図書館を核にしながら、交流するというのが本当にできているのか。「活動支援」や「文化創造」「図書館」「交流」という、「りぶら」が掲げる４つの機能をつないでいくのは、図書館の職員なのか、あるいは市民活動総合支援センターの職員なのかというところです。

この建物の土台である岡崎の全市に散らばっている市民ホームとか、地域交流センターとかの中で様々な形の市民が交流をし、活動をし学習をしているというそこの部分とどういうふうにつながるのか、ということが大事なんですね。

期待される市民の力

しかし、市民ホームや市民センターや地域交流センターというのが、必ずしもここで力をつけた人たちを受け入れるというキャパシティを持っているとは限らないわけで、ある意味で押しかけていかなければならないという側面もあるのかなと思います。ここで力をつけ、その力を持って岡崎市のいろいろなところに出ていくということが、とっても大事なことだし、一人ひとりがもっと身近な自分の地域の中、自然の中や文化の中で育っていくためには、この建物の中だけでとどまらないという体質をつくっていくということが、また大事なことなんだろうと思います。

そういう点で、職員ではなく、いろいろな場所で活動している市民が、公益意識を高めていくということが必要なのではないかと思います。

「りぶら」を総合化していくということは、実は館長の役割ではなくて、まさにいろんな市民の役割なんだと思います。誰でも気軽に来れて、そこで力をつけて、岡崎市民として力量をみがいていくという、まさにまちの縁側で育まれる市民の力が、総合に向かう力なのではないかと思っています。

「まちの縁側」として

今日、チラシのラックに「あなたの学んだことを活かしてみませんか」というチラシがありました。従来は行政が中心的にやって担ってきたことですね。しかし、これからは明らかに市民がつくっていくという時代に入っていくわけですから、市民の力量をつくっていくというためには、りぶらとその地域交流センターや市民センターとの連携の中で、いろいろな講座が企画されていくということが大事なのではないかというふうに思います。

「講師養成講座」とはいっても、参加しないと講師がやれない、ということは全くないわけです。岡崎市の様々な生涯学習の事業は、実は市民が知恵をしぼってつくっていくというふうになった時に、この「りぶら」はとっても大事な役割を果たしていけるだろうと思います。

図書館司書の方々には自分の仕事に誇りがありますから、司書の仕事をちゃんとやりたいと思っています。そのことは大事なことですが、市民は様々な思いを持っているのだということも認識していただきたい。こういう小さな総合の場面をつくりながら、同時に建物としても、大きな総合の設計図をつくっていくということが必要です。そういう成果が、今後、縁側的な交流の中でつくられていくのではないかな、という予感が致しました。

パネルディスカッション
「りぶらを活用した、これからの生涯学習」

小川俊彦
斉藤秀平
米津　眞　　岡崎市図書館交流プラザ総合館長
山田美代子　　りぶらサポータークラブ代表

はじめに

山田：りぶらサポータークラブの22年度の活動も、あと少しで終わります。この1年間の活動のまとめとして、「りぶら」の中での生涯学習について、皆さんと一緒に考えていけたらと企画させていただきました。

米津総合館長のあいさつ

米津：今日は「りぶら」を、生涯学習でどのように活用していくかというお話です。「りぶら」は、4つの機能を持つ複合施設です。その施設を、また個々の機能をどのように活用していくか、ということですね。その機能の有機的な活用が、総合教育である生涯学習の拠点としてのあり方になるかと思います。

「りぶら」の設置にあたりましては、「市民とともに成長する施設」というコンセプトがありました。この施設をつくる時に、市民検討ワークショップなどを開催しまして、設計から管理運営計画まで、市民と行政が協働でつくってきたという経緯があります。4つの機能をどのように活かして、生涯学習につなげていくかということも、りぶらサポータークラブをはじめ、市民の皆さんと協働で、様々な活用方法を模索して確立していくものだと思っています。

2年4ヶ月経ちましたけれども、まだまだそれぞれの機能が活かしきれていないのかなと思います。さらにそれを活かしきった中で、お互いに作用しあって有機的にむすびついていくということも、当然まだまだだです。行政が考えている使い方以上のものを市民の方が見出し、提案をしていただくことによって、もっとうまく活用ができるのかなと思います。

生涯学習とは

山田：私たちはこの3年間、市民団体の活動全体を見て、つなげる活動をしてまいりました。また、行政の思い、市民の思いもあります。こうしてほしいという改善点を行政に伝えるとともに、行政はここまではできるけれどもそれ以上はできない、ということを皆さんにお伝えする。それをつなぐのがサポータークラブの役割です。

それでは、「生涯学習」について、具体的にお話をお聞きしていきたいと思います。

斉藤：勉強というと、「強いられる、努める」という意味合いがあるのですが、「勉強」では、本当に一人ひとりの人間が力をつけていけないのではないかと思います。学校という年代的に限られたところで学ぶことは、80年90年生きていく人間にとってみれば、あるいはどんどん技術が進歩し、変わっていく急激な変化の時代の中では、10代20代前半だけの「勉強」では足りない。そういう意味で、「生涯」という言葉がつき、次に「学習」という言葉をちゃんと位置づけなければならないのではないかと、そんなふうに思います。

小川：「生涯学習」というのは、基本的には「自ら学ぶ」ということであり、強いられてすることではありません。

戦後でも、お上の方には、日本人は誰かにいわれなきゃ学ばないんだという意識があった。それを変えるために図書館法が制定されたのですが、法律はできたけれども、少しずつ骨抜きになっていったこともありますし、図書館職員側が、「図書館は自ら学ぶために必要な場所なのだ」ということに気がつかなかったこともあったと思います。自ら学ぶことを考えていくと、図書館の機能を改めて見直す必要があります。自ら学ぶことは、生きることにもつながるわけです。

もうひとつは、「自分の生活をどうしたらより高めていけるか」ということです。それを人から言われるのではなくて、自分自身が生き方を探っていく、探るために何が必要なのか、どういうことがいいのかということを考えていく、それがまさに生涯学習なんです。一人ひとり、その学習テーマは全く違っていていいものなんです。

誰かがいったからではなくて、あの

人はこうだけれども、自分はこうしたい、と判断することが必要です。図書館には様々な資料や情報があり、判断する素材を提供しています。誰かが薦めたから、あるいは図書館員が薦めたからではなくて、一人ひとりが必要な情報を引き出して、自分がこう生きようと考えることが重要です。

実は今、大変怖い時代になっていまして、テレビが取り上げた本は、その日のうちに予約が殺到します。でも、何ヶ月かするとすっぱり消えていくんです。テレビでドラマ化されたとか、紹介していたとか、新聞にこう書いてあったということだけに影響される日本人が、ものすごく増えています。

これはまさに生涯学習に反していることなんです。いってみれば、戦前の思想統制みたいなことが、マスメディアによって進んでいるのではないかという心配すらおきるほどです。市民は、一定の情報に殺到して、図書館に要求してきます。これは生涯学習とはいえません。まあ、時間つぶしにはなるかもしれないけれども、という感じを持っております。

米津：第２次の岡崎市生涯学習推進計画の中では、『生涯学習とは、全ての人がそれぞれの生涯を通じて、自発的な意識に基づき、主体的に行う学習生活の総称』と規定しております。生活に必要な知識・技術の習得、余暇に楽しむ趣味や文化活動、スポーツレクショーション、地域の課題に取り組むボランティア活動など、様々な内容が生涯学習に含まれます。

今、ベストセラーで『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの「マネジメント」を読んだら』という本がございますが、そのドラッカーが、『ポスト資本主義社会』という著作の中で、この20世紀を「知識社会」と規定しています。「知識社会においては、継続学習の方法を身につけておかなければならない。内容そのものよりも、継続学習の能力や意欲の方が大切である。『ポスト資本主義社会』では、継続学習が欠かせない。学習の習慣化が不可欠である」というふうにおっしゃっています。

本で読んだ情報だけでは知識ではない。それを自分でいろいろと経験して試してみて、それが知識になっていくということです。図書館で本を読むだけではなくて、自分で経験して仲間をつくって、地域の課題やいろいろな課題を自分たちで解決していこうとか、そういうところまで深めていくことが生涯学習の行き着くところなのかと思っております。

司書の資質と、司書に求められるもののミスマッチについて

山田：参加者から「本が好きで司書になる人は、司書の仕事の一部に、市民サービス・対人サービスが求められるということに疎いというか、ミスマッチがあると思うのですが、こうした構造的あるいは根本的な課題を解決に導くとするための具体的なアイディアがありますか」というご質問がありました。

斉藤：図書館は、いろんな知識を身につけることを確立してきました。また、図書館司書の方々は、能力を鍛えていますから、その力量を中心にして、市民と接することになります。市民の生活のひとつひとつの悩みを聞きながら、長い時間をかけて問題を解決することになります。市民の方も、図書館司書の方々に、本だけではなく、もうちょっと広がっていく要求というものを訴えていく粘り強さが必要かと思います。

岡崎は、岡崎市がどういう繁栄をつくっていくのかという点で、この「りぶら」を非常に大事な建物としてつくっているわけですから、その大きな市民的課題である一人ひとりの生活の課題と結びつけながら、考えていくこと、本を読むこと、情報を獲得すること、文化を体系的に身につけること、歴史的に掌握することが大事です。今のところ、少しミスマッチでありながらも、粘り強くやっていくことが大事だと思います。

小川：日本の場合には、司書資格を取るには、大学でとりあえず20単位をとればいいのです。ヒマだから受けておこうかという人が年間１万人くらいいるのですが、職員として働けるのは100人くらいで、受け皿がないという現状です。

司書とか学芸員とか保育士とか看護師とか、そういう人たちが全部その中に一緒に入って運営されるような施設こそが、生涯学習施設になれる、と私は思います。図書館という機能もあるけど、司書だけがいればいいのではなくて、学芸員がいることによって博物資料のことがわかるとか、あるいは、学校の先生がいるとかなり助かります。子どもたちの見学などにすごくうまく対応してくださることもあります。

図書館だから司書でなければいけないということは絶対ないはずで、むしろ多様化している方が、今の時代の受け皿として確かなものになります。それを実現させるのが、りぶらサポータークラブということで、お話を聞いていると、むしろ時代に先行しているなあという感じがします。だから、年間150万人が集まる。ちなみに、150万人を集める公共施設というのは、動物園を除いてはたぶんここが１番です。誇りに思える施設になっていると思います。

りぶらサポータークラブの役割

米津：市民の皆さんの要求は、高度成長時代と比べると本当に多様化していて、いろいろなことが求められています。そして、行政だけではそれに応えられなくなっているのが現状です。

新しい公共という考え方があり、これは行政だけが公共を担っていくのではなく、担える人たちがみんなでしていきましょう、というものです。そうしなければ、今後の日本は、たちゆかないなと思います。この「りぶら」を

つくる時も、そういう思いの中で設計段階から協働が始まり、ワークショップの中から、りぶらサポータークラブが生まれてきました。ただ箱をつくるだけではなくて、今後の運営に関わるという流れができてきた。そのあたりがおそらく「りぶら」の本当の強みなのかなと思います。

ですから、このりぶらサポータークラブという組織が、行政と長くいい関係を持って、りぶらの発展に寄与していただけると、本当にいい施設になっていくんだろうなと思っております。りぶらサポータークラブにおしつけるような発言ではありますが、実際に「りぶら」だけではなく、岡崎市全体がそういう形になっていかないと、本当に市民の豊かな生活を実現していくことは、今後難しいんだろうと思います。

それは、公益活動を行う市民活動団体だけではなく、市民の一人ひとりが、自らがどのようにい生きたいかということを考え、自らが行動していくというスタイルを作っていくということでもあります。ただやってくれるのを待っているというだけでは、豊かな生活には覚束なくなってきているという状況をお知らせしておきます。

山田：りぶらサポータークラブとしては、重い課題をいただいて、館長に振って、戻された感じがありますが、自分達の力の範囲でお手伝いをしていきたいなと思っております。意見の中に「生涯学習をはじめとしたりぶらでの市民活動が、岡崎市全体にとってどのような効果を生み出しているのか、あるいは生み出してほしいのか。イメージがあるのなら提示してください」というのがありました。今のお話は、そういうことを含んだお話です。私達もそういうふうに思いながら、りぶらの中でひとつの実験的なモデルとして、いい形になればいいと思っています。

斎藤：これまでは、講座の企画も行政が全部やって、参加する市民は、承って座って聞くだけで、終われば黙って帰って行くというふうですね。市民か行政か、というかたちの問題だけではなく、もうちょっと素敵な事業をやろうとなれば、そこの境界の中で、様々なしかけをつくっていくことが大事になってきます。生涯学習講座があって、市民で講座をつくろうなんていうのは、当たり前のことなんです。自ら学ぶという場所が生涯学習で、講座を企画するというのは、本来市民自ら行うべき事なんです。

にも関わらず、講座企画は行政が全部設定し、それに慣れて乗っかればいいという形できたのがこれまでの市民センター的な生涯学習だった。やっぱり、もう一回、市民自身が企画をするという原点に立ち返った方がいいのではないかと思います。企画をすることに対して、行政はいろんな援助をしたり、印刷をしたり、情報を流してくれたり、ということは当然しますが、学ぶべき中身というものは市民が設定していくのが、近代資本主義社会では当たり前のことなんです。

「生涯学習講座」というのはとても素敵な企画です。しかし、講座を成功させるだけではなく、失敗をして、しょぼくれる企画があっても、それはすごくいいことだと思います。我々の生活の中には、失敗をすることで得る価値もあるわけです。行政は、人が集まらないと失敗と断定してしまいます。それは困りますから、確実に人が集まるような企画しかやれない。市民がやれば、失敗しても、まあ失敗したらいかんのですけれども、それを反省材料として次のステップをつくればいいのです。そういう点で、市民企画の講座は、「りぶら」の非常に大事な出発点になっていると思います。

小川：行政が全部をしなきゃいけないということではなくて、民間側・市民側がそれを受けて、どう実現させていくかをもっともっと考えていただくことが、大きなポイントになるんではないかと思います。

図書館と市民活動の乖離について

山田：今現状を見ていますと、市民活動をされている方は、図書館では個人的には本を使っているけれども、図書館の資料を使って何かをしようということは、あまり見受けられません。また、図書館で本を読んでいらっしゃる方は、個人的に本を読んでいて、市民活動はまた別だわ、というように、なんとなく乖離しているようなところがあります。それを統合させるにはどうしたらいいのか、ということで何かアイディアがあれば、お話ししていただきたいと思います。

米津：乖離があるというのは、例えば、このりぶらホールで子ども向けのイベントをした時、外にそれに関する子ども用の図書がここにありますよ、という展示を出すとか、こども図書館の方に、今日はこんな子ども向けのイベントがありますのでぜひ行って下さい、という案内を出すということがされていないということかなと、そう思ったんですが。

これはまあ究極的にいえば、私の責任だなーと（笑）、そう思います。要は、職員の意識ということですね。職員が、どこまでその意識を広げられるかだと思います。たくさんの利用者があって、職員も自分の仕事を終えるのに精いっぱいという状況があります。だから、なかなかそういうところまで目が行き届かない、手がいかないというところがある。でもこれは、常にそれを頭に入れておればできていくのかなと思います。

これは、一職員がというのは難しい話で、上の管理職がそれを常に思って、部下に対してしなきゃいけない、そういう構式にする必要があるということです。ということを含めて、私の責任かなあと思うわけですけれども、ですから、そういう意識を持つ人間がここに配置されることが、まずは解決の道かなあと思っています。

それと、行政と市民をつなぐ部分で、りぶらサポータークラブがあったり、市民活動センターを運営している岡崎まち育てセンター・りたがあるということです。どうしても行政と市民というのは、要求とそれへの不対応という対立した姿勢ができてしまうのですが、

そこをつなぐ団体がこの「りぶら」にある、ということが非常にありがたいことだと思っています。

山田：今、総合館長が、私の責任かとおっしゃいました。そういう思いを持って下さっている管理職の方が増えて下さることを私たちも願っておりますが、私たち市民も、こういうことをしてほしいと言わなければ、変わっていかないんだと思いますので、皆さんも思いがあったらどんどん出していただきたい思います。

生活のうるおいの場・癒しの場である「りぶら」をもっと深めるには

斉藤：図書館に来る方は、個人の自由を大切にしていますから、一人で利用して帰っていく人が、日々6,000人の中の大勢だろうと思います。ただ本を借りていくだけではなく、その次の仕掛けづくりを、誰がどうするのかということのひとつに、ボランティア活動があるんだろうと思います。

例えば、パソコンで検索するのが上手くできない人のために、高齢者がボランティアとして立っている。なぜ高齢者かというと、同じような世代の人が教えてくれるとわかりやすいということです。こういうことも含めて、どんなことがやれるのかということで、仲間づくりを考えていくことも必要だろうと思います。

米津：癒しの場をさらに深めていくためには、やはり自己満足や自己実現をどのようにしていくかということがあるかと思います。自分がどれだけ役に立っているかということが、満足度の一番大きなところではないかと思っております。

ただ本を読んで情報を得て帰っていくのではなくて、もうひとつ、もう一歩なにかに踏み出してみる、仲間をつくっていく。それが難しければ、そういう輪に入っていく、あるいはいろんなイベントに参加して、そこで話をしてみるなど。

ただ図書館に通うだけではなく、自分でなにかやってみるということを、ここで見つけていただきたいと思っています。そういう仕掛けとして、「りぶら」で相談や団体の紹介などをしていますので、ぜひ何かに参加していただけたらと思っています。

それから「生涯学習は公益活動になるのか？」というご質問がありましたが、いろいろな考えがあると思います。最終的には公益活動にむすびつくものだと思っておりますが、ただ初期の段階、自分の学びたいことを学んでいる間は、公益活動ではないと思っています。それが仲間をつくって、課題解決に向かって歩き出せば、それは立派な公益活動だと思っています。

「りぶら」は、メディアリテラシーを学べる場になる得るか？

質問：小川先生のお話の中で、何度かリテラシーという言葉を聞きました。中でもメディアリテラシーは、これから身につけていかなければならないが、放っておいてはなかなか身につかない素養だと思います。情報が氾濫している現在、一種の学習の場というのがないと養成できないのではないかと思います。そこで、この「りぶら」は、メディアリテラシーを勉強する場として、どうなのでしょう？

小川：リテラシーというのは、英語辞書には、「読み書きできること」としか書いてありません。メディアリテラシーというのは 、おそらく1990年ぐらいから、日本ではじまっているんじゃないかと思うんですけれども、私がそれをいろいろ書いてから、もう10年ぐらいたっています。

テレビで毎日流されている情報があります。地震の情報でもリビアの情報でもいいんですけれども、情報は全てが映像に映されて流されているわけではなくて、編集されているわけですね。編集をする時、一番極端なのは削ってしまうことです。それは、とかく隣の国でされていることですけれども、日本でもかなり編集されています。

新聞記事でも同じです。新聞だから同じことを流しているわけではなくて、読売や朝日・毎日・産経・日経という同じ切り口をとってみても、政党の悪口にはかなり温度差があることがわかります。それから、スポーツ誌ひとつとってみても、報知新聞はジャイアンツのことが先ですし、関西で売られている新聞は阪神タイガースのことがメインですが、あれも新聞なんです。

新聞は正しいことを報道している、メディアは正しいことを伝えているといいながら、そういう差別化を図っているわけです。だから、公表された裏側に何があるかということを読み取る力が必要なんです。問題は、流されたものが正しいのではなくて、流された裏にどういう編集がされているか、どういう考え方が入っているか、ということです。

小学校の時から、メディアリテラシーをやらないと、読みとる力は育ちません。大人になってしまうと、自分で勝手に判断するようになる。私としては、図書館でメディアリテラシーをやるのがいいのかどうか、むしろ、学校の中で基本的な読み取り方を教える方が、正解かなと思っております。

山田：今日は、本当に深いお話をしていただきまして、ありがとうございました。私も非常に勉強させていただきました。またサポータークラブの会員もおりますので、今日の話を受け、活動をに拡げていけたらと思います。

また、サポータークラブに所属して私はこういうことをやってみたいわ、と思われる方がありましたら、ぜひ参加ください。会員だけでなく、イベントのボランティアも募集しておりますので、お声をかけていただけたらありがたいと思います。今日は本当にありがとうございました。

りぶら中央図書館情報

ご存知ですか？こんな図書館サービスあります

館内専用データベースの利用

1 階レファレンスライブラリーのデータベース席では、利用者のみなさんの調査・研究を支援できるよう、さまざまなデータベースを無料で利用できるようになっています。多くはインターネット上の検索サイト (一般向けには有料) ですので、図書と違って、常時最新の情報に更新されています。

主なものでは、新聞記事データベース (中日・朝日)、百科事典 (ジャパンナレッジプラス)、ビジネス情報 (日経テレコン 21、JRS 経営情報サービス)、書誌・人物情報 (ブックプラス、マガジンプラス、フープラス) など。ほかに、法令・判例、農業・食品、科学に関するデータベースもあり、調査研究に役立ちます。またネットではなく、CD-ROM 版で検索するデータベースも用意しています。

なお、データベースによってはプリントアウトできないものもありますので、ご留意ください。

データベース席は、ぜんぶで 6 席あります。席によって閲覧できるデータベースが異なりますので、ご注意ください。

レファレンス事例集 10

岡崎市立中央図書館でこれまでに受けた資料相談事例を紹介します。
「へえ～、図書館でそんなことがわかるの !」と感動 (?) できるネタ満載ですよ。

国立国会図書館レファレンス協同データベース
http://crd.ndl.go.jp/GENERAL/servlet/common.Controler より

質問	西三河地方では、アイスの棒のことを「ホセ」と言い、名古屋のほうでは言わないらしいと聞いた。「ホセ」が西三河特有の方言であると書かれた本はあるか。
回答	西三河地方の方言の本にいくつか「ホセ」の記述があるが、豊橋や名古屋の方言の本にも登場するので、西三河地方特有ではないと考えられる。「ホセ」の説明や用例、由来の説が書かれた下記参考資料を紹介。
プロセス	地域資料の方言の本 (分類 :A800 番台) をあたる。
参考資料	①『三河ふるさと辞典』髙橋昌也 / 著 2001 年 ②『西三河の方言』鈴木喜八郎 / 著 1972 年 ③『知立・刈谷の方言』永田友市 / 著 2003 年 ④『豊橋の方言集』豊橋市文化市民部文化課 / 発行 2002 年 ⑤『ナゴヤベンじてん』あらかわそおべえ (荒川惣兵衛)/ 著 1972 年 ⑥『愛知のことば』永田友市 / 著 1978 年 ⑦『愛知縣方言集 [復刻版]』愛知県郷土資料刊行会 1973 年

りぶら映像アーカイブス

岡崎市立中央図書館 2 階の視聴覚ブースでは、ビデオや DVD などの館内資料だけでなく、年代別にアーカイブス化された岡崎に関する貴重なニュース・番組映像を視聴することができます。

懐かしい映像のなかに、ひょっとして、あなたも登場しているかも ?!

紹介映像 10
「ジャズと外科とミュージシャン」
NHK 北陸東海
放送年 : 昭和 58 年 (1983 年)

NHK が「ドクター・ジャズ」こと内田修氏を特集した約 30 分間の番組です。

坂田明さん、渡辺香津美さん、辛島文雄さんなど数多くのジャズミュージシャンが、康生通南にあった内田病院を訪れ、氏と楽しく語らいながら、リラックスしてプレイする姿が見られます。

この映像では、ミュージシャンが内田氏のご家族に捧げた曲の演奏が見られるほか、りぶらの展示室内に再現された「ドクターズ・スタジオ」が、当時どんな様子だったか確認できます。内田修ジャズコレクションを語るに欠かせない資料でもあります。

岡崎図書館未来企画

第１回テーマ展示ブックレビュー開催報告

「桃源郷」

★開催日時　4 月 19 日（火）19:00 ～ 20:45
★場　　所　グループ室１
★ゲ ス ト　千葉真智子さん（岡崎市美術博物館学芸員）

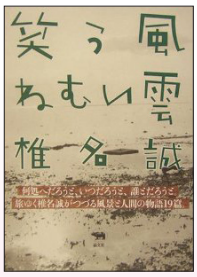
千葉真智子さん (岡崎市美術博物館学芸員) のお話

陶淵明の「桃花源記」についての解説と、春の景観としての「桃源郷」が素材となった、唐から北宋の時代にかけての桃源図について、また、その後日本に伝播した近世から近代に連なる桃源図について、お話を伺った。

また、懐古・回帰趣味的な陶淵明の「桃源郷」に比べ、西洋に発した「ユートピア」は、建設的な意味合いがあるという違いがわかった。その意味で、近代の小川芋銭などの桃源図には、社会主義思想もかいまみえる。美術博物館の展示は、現代の若い作家の桃源図を導入に、陶淵明の「桃花源記」に沿った構成 (洞窟に入っていくイメージ) で組み立てられている。

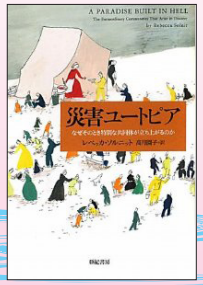
参加者が持ち寄った本の紹介

『桃源郷ものがたり』
松居直 : 著　蔡皋 : 画　福音館書店　E
陶淵明の『桃花源記』を原典として、中国を代表する絵本画家が描いた心の安らぐ絵本。



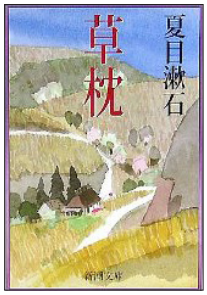
『自然風貌』
竹内敏信写真集　日本カメラ社　748
日本の四季をいろどる自然現象に視点を置き、雨・霧・雲・雪などの、水を中心にあつめた写真集。

『笑う風 ねむい雲』
椎名誠 : 著　晶文社　914.6
何処へだろうと、いつだろうと、誰とだろうと、旅ゆく椎名誠が写真と文でつづる風景と人間の物語。

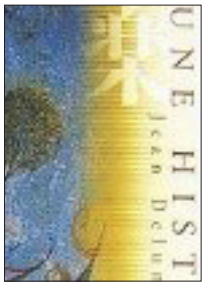


『災害ユートピア』
レベッカ・ソルニット : 著
亜紀書房　369.3
災害が起こったときに現れる「ユートピア」は、なぜ日常に生かされないのか。地震や爆発事故・テロなどを詳しく検証。

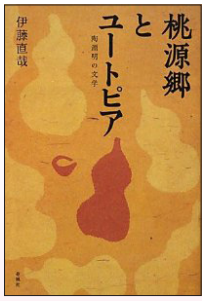
『トンマッコルへようこそ』
DVD　パク・クァンヒョン : 監督
日活　778.2
まさにユートピアとしかいいようのないトンマッコルの素晴らしさがうまく描けており、兵士たちならずとも、永遠にそこにい続けたい気持ちにさせられる。



『草枕』
夏目漱石 : 著　新潮社　B 913.6
俗塵を離れた山奥の桃源郷を舞台に、絢爛豊富な語彙と多彩な文章を駆使して絵画的感覚美の世界を描き、自然主義や西欧文学の現実主義への批判を込めて、その対極に位置する東洋趣味を高唱。



『千年の幸福』
ジャン・ドリュモー : 著
新評論　191.6
「この地上に存続しているはずだと人々が信じた楽園」への希求を紹介する、楽園の歴史。



『桃源郷とユートピア』
伊藤直哉 : 著　春風社　921.4
陶淵明文学の重要なテーマのひとつ「桃源郷とユートピア」を中心とした、思索の歩みを辿る。

『自然を生きる』
福岡正信 : 著　春秋社　615.7
「緑の地球号」は墜落寸前。「どうすればよい？」と問われた著者は、簡単明瞭に「粘土団子の種を蒔けばよい」と答える。

『スモール・イズ・ビューティフル』
E・F・シューマッハー : 著
ダイヤモンド社　331
石油危機を予言し、世界の注目を集めた本書は、現代社会の物質至上主義と巨大技術信仰を告発し、その病弊を抉る。

【感想】

美術博物館との関連で、今回のテーマは「桃源郷」。ブックレビューそのものが、桃源郷のカレイドスコープ (万華鏡) みたいだなと思いました。みんなで同じもの (一つのテーマ) をのぞいているのに、そこにはいろいろな視点からの煌びやかな世界が広がっていました。陶淵明の詠った「桃花源記」では再訪が叶いませんでしたが、ブックレビューには次回があります。お楽しみに！

5・6月　りぶらイベントガイド

催しの予定は変更になることがあります。詳細は主催者へお問い合わせください。

日　時	イベント名・会場	料　金	問合せ先
5月3日（火） 10時・13時	お手玉づくり・お手玉あそび	無料	あいちお手玉の会 井上　080-3076-1754
5月6日（金） 18時30分～	マンスリーイングリッシュサロン ①イギリス	3回分 1,500円	LICC人材育成部 成瀬　090-1826-1149
5月8日（日） 14～16時	ワールドレクチャー（ミャンマー） ミャンマーを知ろう	無料	りぶら国際交流センター 23-3148
5月8日（日） 16時30分～	リコタン、junkoカルテット 母の日　JAZZ	前売り 2,500円	Grooving　Jazz-ami 小椋090-7918-0098
5月12日（木） 13時30分～	読み聞かせボランティア養成講座	無料	中央図書館 23-3111
5月12･15日 （木）10時～	陽だまり性の健康講座	1,000円	勇気づけの子育て陽だまりの会 斎藤080-5137-9192
5月12日（木） 14時00分～	シネマ・ド・りぶら　映画上映会 「おくりびと」	無料	りぶらサポータークラブ 23-3114（市民活動センター内）
5月13日（金） 10～16時	地域市民セミナー"実践の場" ひざ掛けづくり	無料	市民のきもち研究会 事務局　森090-8136-1680
5月13日（金） 10～16時	“シニア”からの過ごし方　案内窓口	無料	市民のきもち研究会 事務局　森090-8136-1680
5月13日（金） 14～16時	地域市民セミナー"しゃべり場№1" 話してみよう聞いてみよう	無料	市民のきもち研究会 事務局　森090-8136-1680
5月14日（土） 18時15分～	パン作り（独身男女対象） 家庭でもできる、本格的な手作りパン	1,500円	食究の会 カガミ　090-1741-8902
5月15日（日）～ 全4回10～12時	新米パパのイクメン講座 ①パパも一緒に遊ぼうパパ友づくり	材料費実費	文化活動推進課 23-3241
5月16･23･30日 （月）14時～	ことばの教室・スペイン語	無料	りぶら国際交流センター 23-3148
5月16日（月） 13時30分～	学びながら古文書を読もう！ 翻刻ボランティア養成講座	無料	中央図書館 23-3111
5月17日（火） 14時00分～	生涯学習シンクタンク 生涯学習計画の実施に向けて	無料	りぶらサポータークラブ 23-3114（市民活動センター内）
5/18・6/25 （土）13時30～	今岡友美ナビゲート レコードコンサート	500円	BWJF柴田 090-9916-5174
5月21日（土） 13時30分～	りぶらサポータークラブ23年度総会と 事業説明会	無料	りぶらサポータークラブ 23-3114（市民活動センター内）

日　時	イベント名・会場	料　金	問合せ先
5月22日（日） 10～12時	りぶら　いきものみっけ隊 自然観察会	無料	りぶらサポータークラブ 23-3114（市民活動センター内）
5月28日（土） 14時～	＜東日本大震災チャリティーコンサート＞ はちまん正人　トリオjapanコンサート	3,000円	チケット申込・問合 プレイハウス0561-32-4516
5月29日（日） 10～12時	新米パパのイクメン講座 ②パパ料理ごはん編	材料費実費	文化活動推進課 23-3241
6月3日（金） 18時30分～	マンスリーイングリッシュサロン ②アメリカ	３回分 1,500円	LICC人材育成部 成瀬　090-1826-1149
6月5日（日） 14～16時	ワールドレクチャー（ペルー） ペルーを知ろう	無料	りぶら国際交流センター 23-3148
6月12日（日） 10～12時	新米パパのイクメン講座 ③パパ流絵本の読み聞かせとて遊び	材料費実費	文化活動推進課 23-3241
6月16日（木） 14時00分～	シネマサロン・セミナー 「『おくりびと』の現場から」	無料	りぶらサポータークラブ 23-3114（市民活動センター内）
6月18日（土） 10～12時	りぶら　いきものみっけ隊 自然観察会	無料	りぶらサポータークラブ 23-3114（市民活動センター内）
6月18日（土） 13時30分～	りぶらまつり2011説明会	無料	りぶらサポータークラブ 23-3114（市民活動センター内）
6月21日（火） 14時00分～	生涯学習シンクタンク 生涯学習計画の実施に向けて	無料	りぶらサポータークラブ 23-3114（市民活動センター内）
6月25日（土） １部：13:30～ ２部：15:00～	人権男女共同参画推進講演会inりぶら 「選んで、生きる。」 １部：世界がもし100人の村だったら ２部：玄牝-げんぴん -	無料	文化活動推進課 23-3241
6月26日（日） 10～12時	新米パパのイクメン講座 ④パパ流おやつ編	材料費実費	文化活動推進課 23-3241

「絵本を送ろう」プロジェクト
ご協力ありがとうございました。

急な呼びかけでしたが、大勢の方にたくさんの本を寄贈していただき、多くのの手で発送作業を進めることができました。

仙台市（あゆみネット）・所沢市（クレヨンハウス）、加須市（双葉町支所）などへ、約５,000 冊の本を送付しました。

私の一冊　vol.10

『あの頃の誰か』東野圭吾：著　光文社文庫

岡田貴浩（おかだ　たかひろ）
NPO 法人岡崎まち育てセンター・りた 指定管理チームリーダー。よりなん・なごみんと渡り歩き、満を持してりぶら市民活動センターにこの４月より勤務。まちの人々の声を生で聞いてきた経験を、中央で活かすべく奮闘中！

ご存知の方も多いとは思いますが、著者の作品は、ここ数年で多数が映画化やドラマ化されています。著者を知らない方でも、映像化された作品を知っている人は多いでしょう。

この本は、著者の 80 年代から 90 年代の短編を集めたもので、本人があとがきで「わけあり物件」と言い訳 (?) している作品集です。バブルの時代に使われていた、今では死語となった言葉が使われていたりもして、何だか懐かしく、違った意味でも楽しめます。

中でも『さよなら「お父さん」』は、長編作品『秘密』の原型となっており、たった 24 ページにまとめられていますが、読むと何か物足りなさを感じて、長編作品の方を読みたくなる、そんな作品です (事実、僕もこの本を読んでから、久しぶりに本を読み始めました)。

本を読むことが苦手な方、時間がなくて長編を読むことができない方には、ぜひオススメしたいそんな一冊です。

りぶらサポータークラブ協働事業募集

【りぶらサポータークラブの目的】
りぶらサポータークラブは、りぶらとの協働を通じて、新しい市民協働の理念を模索しながら、市民相互の交流の活性化と、岡崎市全体の生涯学習の発展に寄与することを目的としています。行政と市民のサポーターとして、事業を企画し実施していきます。

こんな協働事業を募集しています。

1. 施設の活用を促す事業。
2. 生涯学習の発展に寄与する事業。
3. 男女共同参画に関連する事業。
4. 中心市街地の活性化に寄与する事業。
5. 図書館の資料を活用する事業。
6. 利用者の交流を促す事業。

随時、相談を受け付けています。

小さなアイデアでも、
みんなで膨らませば、
きっと楽しいことができます。
さあ、私たちと一緒に、
新しい事業を立ち上げてみませんか！
スタッフ参加も大歓迎 !!

「Libra I on」編集員募集

この誌面を一緒に作りませんか？
インタビューをしたり、記事を書いたり、
構成や編集も教えます。

事業スタッフ募集

５月 21 日（土）14:40 から、会議室 301・302 において、今年度の事業についての説明会を開催します。りぶらで何かお手伝いをと考えの方、ぜひご参加下さい。りぶらが、あなたのサポートを待っています。

「こんなことできるかな？」
と思ったら、
お気軽に声をかけて下さい。
月・火・木・金の午後、
活動コーナーに会員がいます。
もしくは、info@libra-sc.jp
へお問合せください。

Libra I on vol.15　2011/5/1 発行　2008/11/1 創刊　◆編集・発行：りぶらサポータークラブ
〒 444-0059　岡崎市康生通西 4 丁目 71 番地　岡崎市図書館交流プラザ市民活動センター内
TEL/0564-23-3114　FAX/0564-23-3142　info@libra-sc.jp　http://www.libra-sc.jp

(1) 個人会員 : 年会費　2,000 円
(2) 団体会員 : 年会費　2,000 円
(3) 賛助会員 : 1 口　1,000 円 (随時)